

細やかな配慮で
美しい花を育て続ける

浦田 光裕 (42歳)

宇陀市榛原福西



けではないらしい。3年間の研修を経て、平成3年から地元に戻って花壇苗の栽培を始めた。

持ち合わせた性格が
花き栽培に合っていた

花き栽培は、観察力と細かい作業が必要だが、持前のまな性格が合っていたのだろう。「細やかなんで大げさ」と浦田さんは笑うが、花の種類に合わせて土作りをし、こまめに芽や花の表情を見ながら、与える肥料や調整剤を微調整し、着実に品質を向上させてきた。

平成22年には、浦田さんが育てたプロフュージョンが「ポットプランツコンテスト・春の部」で、(株)誠文堂新光社「農耕と園芸」賞を受賞した。そのことが、安定して品質の高い花を栽培している証拠といえるだろう。「大事なのは土づくり。おいしい土じ



やないと、きれいな花は育たないんです」と浦田さん。土づくりから配達まで浦田さんの仕事は多岐にわたるが、植物の状態を見ながら微調整をすることが、品質向上と安定出荷のカギを握っている。

「失敗は成功の元」

浦田さんは、毎日、作業日誌を記録し、品質向上につなげると同時に、成功と失敗の間にある原因と結果を明らかにするように努めている。実は、以前に一度大きな失敗をしている。パンジーを播種する際、消毒を念入りに行わなかったばかりに、黒根病を発生させてしまい、苗を全滅させてしまったのだ。その時の苦い経験が、細やかな栽培に磨きかけた。

また、12年前には台風でほとんどのハウス施設はパイプハウスが多いが、今後、台風にも強い施設に入れ替えていきたいと考えている。

現在は、奥田園芸の傘下でグループの一員としてもホームセンターへ出荷するほか、平成21年には、奈良と和歌山の花壇苗生産者が集まり、協同組合関西プランツを設立した。主にホームセンターを取引先とし、共同出荷を行っている。現在、浦田さんは理事を務め、メンバーは17名にのぼる。

現在、全生産量のうち約70%をホームセンターへ出荷しており、価格の安定や



やわらかな色合いのペチュニアは春の花。

花壇苗の
将来性を感じて

「まだまだ若手だから、あまり偉そうなこと書かんでよ、あはは」と、照れくさそうに笑う浦田光裕さん。終始、笑顔で受け応えるなかで、時折見える真剣な表情に、花壇苗栽培への情熱と、仕事への真摯な姿勢が垣間見られた。

浦田さんの「浦田園芸」は、近鉄榛原駅から車で10分ほどの場所にある。大量販店や通信販売の企画会社などを通じて一般用に販売する花壇苗を中心に栽培し、ハウス面積1300坪と、200坪の露地栽培と合わせ、年間約80万ポット

を出荷している。春と秋が主な出荷時期となり、春にはペチュニア、マリーゴールド、プロフュージョン、秋にはパンジー、ピオラ、アリッサなどのほか、野菜苗が加わり、年間の栽培品目はおよそ25品目にのぼる。

浦田さんは、農家の長男として育ち、ごく自然な流れで跡継ぎの道を進んだ。奈良県農業大学校で学ぶ中で、花壇苗の将来性を感じ、花き農家へ研修に出る。

「花の栽培って、イメージがきれいでしょう。それまでは、どの花がパンジーかもわからん程度だったけど、両親と同じことをやっても仕方ないからね」と、当時はそれほど花に対する情熱があったわ

多様な品目
奈良県の花き栽培

平群の小菊や榛原のダリアなど、奈良県内の花き栽培は、国内でも有数の生産量を誇る品目がある。ちなみに、奈良県の農業算出額は413億円(平成21年度)であり、花き算出額は39億円と10%近くを占めている。この比重は、全国的にも高い数字になっている。

花き栽培の中で、切り花では、キク類(全国7位)、小ギクでは2位)、切り枝(全国10位)、バラ(全国20位)、球根切り花(ダリア、チューリップ、アイリス、フリージア、ユリ等)が主な生産物である。また、鉢花・花壇苗では花壇苗類(全国5位、パンジーでは4位)、シクラメン(全国15位)をはじめ多様な品目が揃う。



出荷量の増加に期待をかけている。「消費者のニーズを取り入れつつ、それぞれの品種をイメージした完成形に近づけるように栽培していきたい。正直、売れる花がいい花なんです」と浦田さん。品質向上はもちろん、他の商品と差別化するためにラベルを付けるなど、販売面についても細やかな配慮を続けている。

